

ムラのミライ 活動レポート & ニュース

2022
3

CONTENTS

Report 1 子どもが安心して話せる大人を増やそう

「子どもの話を聴く技術」体験セミナー 開催報告
インタビュー:SOSを出せる社会と一緒に
寄付募集:「子どもの話を聴く技術」動画教材づくり

Report 2 セネガルからの活動報告

成長するファーマーズ・スクール

Story 30周年に向けて

わたしの未来 ムラのミライ



認定NPO法人ムラのミライ

住 所 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22 早川総合ビル3F

電 話 0798-31-7940

E-mail info@muranomirai.org

ウェブサイト <http://muranomirai.org/>

子どもが安心して話せる大人を増やそう

2022年度から、子ども支援者を対象とした新しいプロジェクトを始めます。大人が聞きたいことを聞くのではなく、「子どもが話したいこと」を聴く技術(メタファシリテーション)を講座や教材を通して広めようという試みです。2022年1月に「子どもの話をもっと聴けるようになりたい」という方を対象にした体験セミナーを開きました。

セミナー

「子どもの話を聴く技術」体験セミナー 開催報告

西宮での「助け合う子育て」プロジェクトでの学びを経て



2018年から3年間、兵庫県西宮市で子育て支援を行うNPOへの伴走支援をとおり、支援者向けのマニュアルや研修教材づくりを行ってきました。NPOが内部で人材育成をできるようになったことで、孤独な子育てを地域で助け合う人の輪は今も広がっています。一方で長引くコロナ禍で、すでに2年間も、休校やオンライン授業、登園自粛によって子どもが学校・家庭以外で、日常的に話ができる機会が制限されています。

私たちは、子どもが安心して話せる大人を増やそうと、子ども支援に携わる方向けに、メタファシリテーションを生かした「子どもの話を聴く技術」を紹介する動画教材づくりを企画。12月から2月まで冬募金を実施し、1月には「子どもの話を聴く技術」を紹介する体験セミナーを実施しました。

例えば…

- 「なんでちゃんとお片付けしなかったの？」
- 「どうしてもっと早く寝なかったの？
だから、また朝眠いんじゃない。」

大人は、子どもに「理由」を聞いているつもりでも、
子どもは、**○○○○** を答えるだけ



20

セミナー資料の抜粋

「子どもの話を聴く技術」体験セミナー

第1回 0歳から10歳までの子ども編

日時 2022年1月22日(土)14時から15時30分
対象 0歳から10歳までの子どもの保護者、支援者など
参加者 12名
講師 山岡美翔（ムラのミライ理事/職員）

第2回 10代の子ども編

日時 2022年1月30日(日)10時から11時30分
対象 10代の子どもの保護者、支援者など
参加者 18名
講師 原康子（ムラのミライ研修事業チーフ）

「子どもの話を聴く技術」体験セミナーとは

身近な人の想いを聞きたいのに、聞けずに一方的に話してしまったり、相手に話してもらえなかったことはありませんか？もし、その相手が子どもや若者なら、まずは、私たち大人が信頼関係をつくり、子どもが答えやすい投げかけをすることで、子どもたちは安心して話ができるようになります。

先の見えないコロナ禍で、人と会う機会が制限され、子どもたちは学校と家庭以外で話す機会が減っています。大人にも、子どもにもストレスが生じやすい今だからこそ、大人と子どもが日常で分かり合うことのできる「聴く技術」をご紹介します。

セミナーで学べること

「なんで？」、「どうだった？」を使わずに、大人が子どもの話を「聴く技術」を90分で学ぶ体験セミナーです。子どもが安心して話をするために、私たち大人がどんな対話を試みたらいいのか、心構えだけではなく、子どもとの日常のやりとりで使える簡単で実践的な手法を紹介します。

対象者

- ・0歳から10歳、10代の子どもの保護者もしくは子ども支援に関わる支援者
- ・保護者や支援者でなくても、日常的に子どもとコミュニケーションをする仕事に携わり、子どもとのコミュニケーションを改善させたいと思っている人

子どもの話を聴くために、大人の投げかけを変える

体験セミナーは、参加者が関わる子どもの年齢別に10歳までと10代の子どもとの対話をテーマに2回に分けて行いました。子どもの話を聞くために、「なぜ」という思い込みを答えさせる質問を使わないこと、求められない提案を我慢することをお話ししました。その代わりに事実質問によって、子どもが話したいことを一般化しないで、具体的に聞く方法を紹介しました。

30人の参加者のうち22人は、過去にメタファシリテーション講座に参加されたことがある方でしたが、「話をじっくり聞く前に、子どものためを思ってすぐ提案してしまう。」という声が多く聞かれました。

体験セミナー参加者の声

- ・日頃家事をしたり、子育て、仕事の忙しさで、すぐに「なんで？」を連発している。それを振り返ることができた。まず飲み込んで堪える練習が必要だと思った。
- ・子どもにとって「片付け」はざっくりワードだということが発見だった。「片付けてね」は具体的な指示だと思い込んできた。子どもはどこに何をしまえばいいかイメージできてないことに気づいた。事実質問をしようとはしていたけど、子どもの自己肯定感に配慮した視点が欠けていたので、がんばりたい。
- ・支援先の子どもが低年齢で、まだ時系列があやふやな時期なので、過去のことより最近のことから聞いていこうと思う。子どもの年齢に応じて理解度は異なるので、その子自身が理解できる言葉に一度変換して、質問しないといけないなと思った。

質問を変えることで聴けた、子どもの声

セミナーから約2週間後には、希望者に個別ヒアリングを実施し、受講者が家庭や職場で子どもとやりとりをした内容を振り返りました。

個別ヒアリング参加者の声

・Aさん（NPOスタッフ）：居場所支援を行う職場で、子どもたち（10歳以下）に「学校どう？」という質問をやめたことで、子どもの最近の行動や関心を聴けるようになり、子どもと話すのが楽しくなった。子どもってこんなに話したいんだな、というのがわかった。居場所に来る子どものリピーター率を増やし、今後も現場で子どもの声を聴いていきたい。

・Bさん（NPOスタッフ）：高校生のお子さんがあるご家庭を支援している。家を訪問すると、お子さんがアイドルのテレビを見ていて、アイドルにはいつから興味があるのかなどを聞いた。相手が自分の子どもだと話してもらえないときもあるけど、支援先のお子さんのことは関心があることを入り口に、事実質問でどんどん話を聞けるようになった。

・Cさん（会社員）：セミナー受講前と受講後では、自分の子どもに対する聞く姿勢が全く変わったと感じる。「なんで？」をやめたり、求められていないアドバイスをやめるというのは、なかなか難しいということを実感。気づくとやっちゃって「はっ」とするけれど、少しずつ意識が定着し、これまでよりも子どもが話す時間が増えた気がする。これまでは私ばかり話していた。

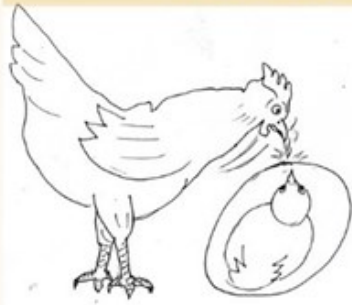
個別ヒアリング参加者には、子どもとのやり取りを記録して事前に送ってもらったことで、子どもが話したい場面で、大人がどのような投げかけをすればいいかなど子どもの話を聴くための練習方法を一緒に考えることができました。受講後の個別ヒアリングは初めての試みでしたが、参加者が事実質問を使うようになったことで、自分の質問が子どもにとっては答えにくい質問だったと気づけ、子どもが嬉しそうに自分の話を話してくれるようになったと実感されていたことが印象的でした。

社員研修で、PTAで、自治体で… 「子どもの声を聴く技術」体験セミナー 講師派遣のご案内

ご紹介したセミナーを、所属先(職場や活動先・学校など)でオンライン開催しませんか？
ご希望の方は、ムラのミライ事務局(Eメール:info@muranomirai.org/電話:0798-31-7940)までご連絡ください。

- ・参加人数 4名から
- ・費用 77,000円(税込)
- ・対面での開催をご希望の場合はご相談ください。

Trust & Wait 信じて待つ



1. やさしく温める
2. 適切な時機を見計らって上手に突っつく(⇒事実質問)
3. 信じて待つ

★変化は内側から起こる!

相手(子ども)の課題は、
子ども自身が自分の力で解決できる力を持つ

36

セミナー資料の抜粋

セミナー・ヒアリングから教材づくりへ

今後も子どもたちが日常的に安心して話ができ、困ったときにはSOSを出せる場所が増えていくよう、教材づくりに取り組みたいと思います。講座参加者の方のご意見は、2022年度の講座づくりや支援者向けの動画教材づくりに生かします。

ご参加くださった皆様ありがとうございました!

(山岡美翔 ムラのミライ理事/スタッフ)



インタビュー

SOSを出せる社会と一緒に

よりよいミライをつくる仲間として活動した3年間とこれから



小園高寛 さん

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ
Japan Community Impact (JCI) 事務局

2015年JCI入職。J&J日本法人グループの社員の皆さんの活発な地域貢献活動、ボランティア活動を縁の下から支える小園さん。NPOへの助成事業では、社員の皆さんがボランティアで伴走支援に入る仕組みがあり、その調整も担っておられます。社員の皆さんからもNPOの方たちからも両方の話も聞く機会が多く、「相手の話を聞く技術」メタファシリテーションを日々のお仕事で使ってくださっているそうです。

出会いは助成金申請

2018年からの3年間、ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループからの助成を受け、ムラのミライはNPO法人a little（兵庫県西宮市）とともに、「西宮で広げる地域で助け合う子育ての輪」プロジェクトを実施しました。

プロジェクトには、3年間で延べ700人もの方々に参加していただき、1人だけ/家族だけで産前産後を乗り切るしかなかった人たちにアプローチすることができました。

3年間の助成終了後、a littleは独自に人材育成ができるようになり、子育て支援者が今も増え続けています。ムラのミライにとっては、事務所のある西宮市で3年間じっくり関わることでできた初めての国内プロジェクトとなり、「地域で子育て」という新しい分野へのチャレンジを応援していただきました。

「西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪」プロジェクト

期 間 2018年4月1日～2021年3月31日

場 所 兵庫県西宮市

協働者 特定非営利活動法人a little (ア・リトル)

協 力 ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

少子高齢化が進み、子育ては「母親だけ(家族だけ)で子担う」という大きな負担を強いられています。

こうした課題に対し、助け/助けられる、という共同養育の実現を目指す「a little」との協働プロジェクト。

産前/産後を迎える女性とそのパートナーと、彼女(彼)たちへの支援を希望する人たちを対象に、西宮市で調査や講座を3年間かけて実施し、地域で助け合う子育ての仕組みづくりを行いました。ムラのミライは、a littleを中心に子育てに関わる人たちの力を最大限活かせるよう、持っている力を引き出しながら、メタファシリテーション手法を用いて支援しました。

J&J社員の皆さんのプロジェクトへの応援

山岡 2018年の事業開始当時から2021年3月の終了まで、JCI事務局でプロジェクトを支えてくださった小園高寛さんに、プロジェクトの振り返りとムラのミライに対するこれからの期待について、お話を伺います。

改めまして、3年間のご支援ありがとうございました。少し前のことで恐縮ですが、2018年1月にムラのミライからの申請書がJCIに届いたとき、小園さんはムラのミライやメタファシリテーションについて、ご存知でしたか？

小園さん いいえ、申請書をいただいて初めて知りました。2018年にムラのミライさんへの助成決定後、「まずプロジェクトで使用される手法を自分たちが理解しておきたい」と、伊藤（当時のJCIマネージャー）とメタファシリテーション基礎I講座（現在のステップI講座）に参加させていただき、メタファシリテーションを初めて学びました。その時は、自分のなりたい癖をペアワークで練習したという記憶があるのですが、確かに事実で思い出すと初めての方とても深い話ができるなと思いました。その後は職場でも事実質問を意識するようになりました。

山岡 お二人に講座にご参加いただいた後、2019年に伊藤さんには、a littleの西宮市との協働イベント「もう一つの両親学級」にも来ていただきましたね。その他にも社内イベントでメタファシリテーション・ミニ講座を開いていた等、助成金だけでなく、数々の応援をしていただきました。

ところで、小園さんは2015年からJCI事務局で助成プログラムをご担当されているとのことですが、具体的にはどんなお仕事ですか？



ムラのミライの支援の特徴は「支援する人と支援される人が一緒につくる」こと

小園さん 助成公募の手続きや書類の準備、社内審査回覧など主に事務作業です。助成決定後は、中間報告や最終報告で助成事業の進捗状況を確認しています。

山岡 そうなんですね。JCI助成にはたくさんのNPOの方が申請されてきたと思いますが、ムラのミライのa littleへの伴走支援の特徴は何だったと思われますか？

小園さん とても印象的だったのは、一般には「受益者」とよばれる「支援される側」が一方向的に支援を受けるのではなく、支援者にもなり、子育て中の方たちが当事者意識を持って、課題解決のために「子育てを助け合う仕組みをつくる」という点です。過去に助成してきた活動で、当事者自身が支援者にもなる、という視点でのプロジェクトはこれまでありませんでした。

メタファシリテーションを NPOへの伴走支援に

山岡 ムラのミライのa littleへの伴走支援を、当事者主体という本質の部分で評価していただいたのは、大変ありがたいことでした。さて2018年にご参加いただいたメタファシリテーション講座後、小園さんがお仕事で、実践されたことはありましたか？

小園さん はい。助成をさせていただいているNPOさんから年2回、中間報告と最終報告がありますが、その際、事実質問を意識して質問するようにしていました。特に、NPOさんの方から悩みごとが出たときは「過去に類似のことはありましたか？」など、過去のことを聞いて、各NPOさんにとって最適な解決策をみつけられるよう、試みたことは何度かありました。うまくいく時と、うまくいかない時があり、今でも「なぜ？」と言ってしまうことはあるのですが、意識して事実質問を使っています。

山岡 過去のことを思い出しながら聞いてくださっているんですね。事実質問がお役に立てて嬉しいです。

期待しています！JCI助成プロジェクトから発展した新プロジェクト

山岡 3年間プロジェクト助成をさせていただいている間、「ムラのミライは、こういうところをもっとアピールすればいいのに」と思うような点はありましたか？

小園さん 既にムラのミライさんはSNSを活用して上手に情報発信されているので、継続的な発信を続けられると良いと思います。ムラのミライさんの最近のFacebookの記事を拝見すると、新しく「子どもが安心して話せる大人を増やそう『子どもの話を聴く技術』動画教材づくり」プロジェクトを始められたことを知りました。その文章に、弊社のJCI助成がきっかけで、このプロジェクトに発展したと書いてくださっていて、大変嬉しかったです。助成プログラムの経験を生かして、さらに発展した事業になるようこれからも応援しています。

山岡 新プロジェクトへの応援、ありがとうございます。



西宮でのイベントに駆けつけてくださった伊藤佐和さん
(元JCI事務局マネージャー)

子どもの話を聴ける身近な人の大切さ、SOSを出せる社会へ

小園さん ムラのミライさんの新規プロジェクトから、今はSNSを簡単に利用できるため、子どもたちもストレスが多く、直接SOSも言いにくい状況だと感じました。そうした中、身近な親や大人が気づいて、事実質問で子どもたちからSOSを引き出せる人が増えれば、よい世の中になっていくだろうと思います。

また、私がJCIで働く理由の一つでもあるのですが、自分がこれまで周りから助けてもらった恩返しとして今度は誰かを支援したいという人が増えてくると、世の中は変わってくると思います。子育て中の方も、ただ支援されるだけではなく、時には自分が支援者になったり、助け合える環境が楽しいのだと思いますので、ムラのミライさんのこうした活動がより良い未来に貢献していくのだろうと思います。3年間の助成は終わっていますが、引き続き応援していきたいです。

山岡 事業終了後も、ムラのミライで新しいセミナーがあると、社内メールで共有して下さるなど、引き続き応援をしていただき、心強く思っています。

小園さん このインタビューの前に、LGBTQをテーマにした社内イベントに参加したのですが、カミングアウトできる相手が友人しかいない当事者も多く、家族にはカミングアウトが難しいということを知りました。もし親が、子どもが日々感じていることをうまく引き出せば、親にSOSをだしていいんだ、と子どもも思えるのだと思います。まだまだ学校教育などでLGBTQ啓発が十分ではないですが、親が子どもと話しやすい関係づくりができるようになれば、時代は変わってくるだろうと思いました。

山岡 本当にそうですね。御社には、いろいろな社会課題ごとに様々なボランティアチームがあり、会社全体で多様性を受け入れていこうとされています。そして社員の方が、気軽にイベントやボランティアに参加できる環境を支えるJCIの活動も、素晴らしいと思います。また今後も色々な形でコラボレーションができればとてもうれしいです。今日は素敵なお話をありがとうございました。

小園さん こちらこそ、ありがとうございました。

聞き手 山岡美翔

ムラのミライ理事/職員。兵庫県神戸市生まれ、子どもと夫と4人暮らし。趣味は野菜料理とヨガ。2008年から国際協力NGOでインドでの教育支援や女性自立支援、国際理解教育などに従事、2011年には東日本大震災支援活動。「助けたいのに、想いだけでは助けられない」という気づきから、2012年ムラのミライでインターンとして、相手と対等な関係をつくり課題を浮かび上がらせるメタファシリテーション手法を学ぶ。2013年転居を機に地方行政機関で働き、2015年からムラのミライ理事、2017年からスタッフ(関西の片田舎でテレワークをしながら、時々西宮事務所に顔を出しています)。





ご寄付を募集しています

子どもが安心して話せる大人を増やそう

「子どもの話を聴く技術」動画教材づくり

子どもの話を聴く技術を持った大人を増やすことで、
子どもたちが安心して話ができる場所を広げたい。

みなさまのご寄付は、
子ども支援に携わるNPOスタッフをはじめとする大人が、
子どもの話を的確に聴く技術を身につけるための動画教材づくりの
資金となります。

ムラのミライは「認定NPO法人」です。2,000円以上のご寄付は、寄付金控除の対象となります。

子どもたちのSOSをキャッチできない日本の今

日本では、2020年度、自ら命を絶った児童や生徒が初めて400人を超え、小中学生の不登校は19万人以上と、いずれも過去最多となりました。コロナ禍で、学校と家庭以外で話せる場所が減っている現在だからこそ、子どもたちと日常的に話をし、悩んでいる時にはそのSOSに気づき寄り添うことができる大人の重要性がこれまで以上に高まっています。



話を聴く技術を、子ども支援に生かしたい

そこでムラのミライは、これまで言語化されてこなかった支援のノウハウを事実質問で掘り起こし、「子どもとの話し方」に特化したメタファシリテーション動画教材を作成したいと考えています。

教材は、子どもの居場所運営や学習支援に携わるNPOのスタッフ・ボランティアをはじめ、子ども支援を担う方々に無償で提供します。

基礎教材を作成するのに必要な費用を確保するため、今回みなさまからのご寄付を募集することにしました。

子どもが安心して話せる環境を増やそう

教材作成のため、ムラのミライでは今年、子ども・若者支援をしている方々へのヒアリングを始めました。今後もヒアリングを重ねながら、子ども・若者支援NPOと一緒に教材を開発し、活動に忙しいスタッフが少しずつ学べる動画教材シリーズを作成します。その教材を基本型とし、放課後児童クラブ、児童館、子育て広場、児童養護施設、若者自立支援施設など、多様な子ども支援組織のみなさまに活用していただける教材や講座につなげていく予定です。

子ども支援を担う人材を支え、育成し、子どもたちが安心して話ができる環境を増やすために、みなさまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



銀行振込 三菱UFJ銀行 名古屋駅前支店 普通口座 口座番号:6528254
口座名義:特定非営利活動法人ムラのミライ 代表理事 中田豊一
*子ども支援のご寄付ということがわかるよう、振込お名義の冒頭に「C」をつけてください。

郵便振替 ゆうちょ銀行 加入者番号:00880-0-23671
加入者名:ムラのミライ
*子ども支援のご寄付ということがわかるよう、通信欄に「子ども」とご記入ください。

スマホから(カード決済・銀行振込) 左のQRコードを読み込むと、寄付ページが開きます

パソコンから(カード決済・銀行振込) <https://muranomirai.org/support/kodomo2021/>

成長するファーマーズ・スクール

地域資源の循環による農村コミュニティの生計向上を実現するため、その参照点となるモデル農場と研修施設の整備を進めています。モデル農家たちは、指導員への道を歩み始めました。



セネガル ンブール県農村部での循環型持続可能な農業普及拠点構築事業

期 間 2021年3月30日～2022年3月29日(2024年3月29日まで継続予定)

場 所 セネガル共和国ティエス州ンブール県ンゲニエーヌ行政村

協働者 アンテルモンド(Intermondes) *セネガルのNGO

協力者 外務省「日本NGO連携無償資金協力」

土壌の劣化、地下水の塩化で安定しない農業経営、都市部や海外へ職を求めてやむを得ず農村を離れる若年層。

「できることなら故郷の村に残りたい」と考えている若者たちに向けた農業開発プロジェクト。

2017年から2020年にかけて取り組んだ前プロジェクトで育成したモデル農家たちと共に、地域にある資源を多角的に利用した循環型農法のスキルと持続的な農業経営スキルを普及することを目指します。

モデル農場をフル活用

モデル農場での農業実践を担当するセネガルのスタッフが新たに仲間入りしました。マンゴーの木の下、プロジェクトに関わるみんなで未来の農場の姿を描きながら、ああだ・こうだと言いながら策定した栽培計画。計画の時間もスタッフにとって貴重な学びの時間です。

この植物の苗にはどのくらいの水が必要？

この種類の果樹にはどの頻度で水やりをする？

このくらいの面積だと、どれだけの堆肥が必要？

どのくらいの投資でどのくらい利益が見込める？

作物ごとの性質、連作障害、緑肥作物や家畜の飼育による栄養の循環、植栽による土や水の保全…一つひとつ確かめながら立てた計画にしたがって、植物と水と土を循環させる農地の姿を具体化させつつあります。



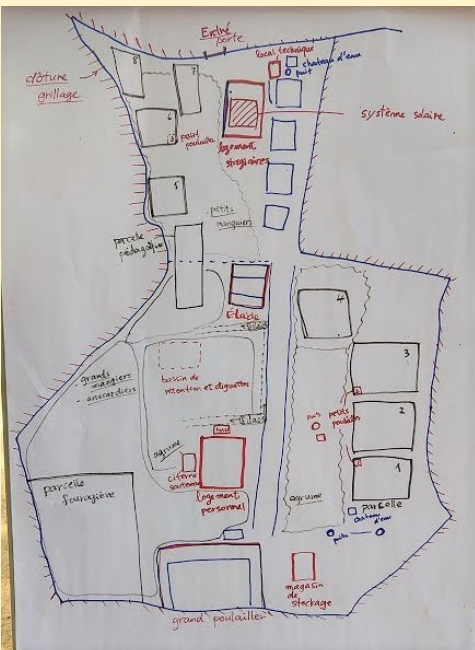
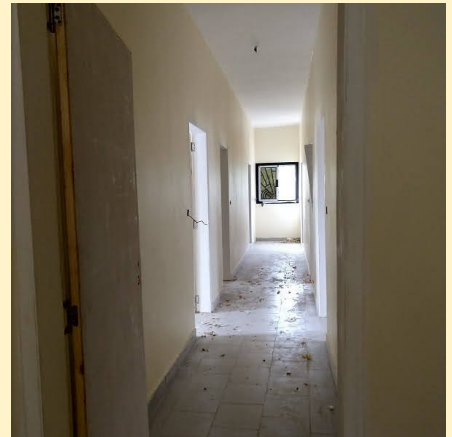


エネルギーも循環型

今年度は、モデル農場で研修を実施するための研修室や研修生・スタッフの宿舎などの建設工事も実施しています。

研修施設で利用する電力を再生可能エネルギーで賄うため、太陽光発電システムも設置。

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、資材の調達などに遅れが生じたこともありましたが、何とか最後の仕上げを残すのみとなりました。



指導員はわたしたち

前プロジェクトで育ったモデル農家たちが、今度は資源循環型農業を周囲に普及するための指導員候補です。

「今まで、あなたたちは研修生でしたが、今度は指導員になってほしい」
そんな言葉から始まったワークショップ。

「今まで習ったことをどのように応用して伝えていくかは、皆さん次第です。そして、このファーマーズスクールでの実践を村で伝えるとき、一緒に働く家族の皆さんが理解できなければ意味がありません。これから研修の内容と、その伝えかたについて、みなさんと話し合っていきたい」
そして、これまでの3年間で習ったこと、今までに実践していることを順番に聞いていきました。

最後には

「自分たちで種を供給できるようにしたい！」
「休耕のシステムについて学びたい！」
と、さらに学びたいことへの意欲ものぞかせた指導員候補たち。
彼らによる研修が今から楽しみです。

(菊地綾乃 ムラのミライ海外事業コーディネーター/セネガル駐在員)



わたしの未来 ムラのミライ

ムラのミライは、2023年で30周年を迎えます。そこで、中長期方針を1年ぐらいかけて策定しようと、活動を担うスタッフや認定講師による話し合いを始めました。まずは各自が「ここ数年、自分がムラのミライと一緒にやってきたことの振り返り」と「2022年以降にムラのミライと一緒にやりたいこと」を持ち寄り、共有するところから…。このニュースレターでも、各担い手によるふりかえりと今後へのメッセージを連載でお届けします。



地元・弘前に中田豊一(ムラのミライ代表理事 写真左)を招き、講演会を開催

平野貴大

ムラのミライ非常勤職員/認定メタファシリテーション講師

私は自治医科大学(出身県で9年間へき地と言われる医師不足の地域で医療をすることで学費が免除される仕組みがある)を卒業し、医師として9年間青森県の大間町、中泊町を中心に地域医療に従事してきました。現在は「地域における真摯で持続可能な医療・介護・福祉を実現する」ことを目標に、弘前大学大学院医学研究科の大学院生、青森県庁の政策アドバイザー、コーチ、カウンセラーなど多方面で活動しています。この活動の一環として、2021年からムラのミライで非常勤職員として勤務しております。

ムラのミライとの出会い

私がムラのミライと出会ったのは5年前になります。

その頃私は、少子高齢化による影響(自宅で介護が困難な家族、老老介護、高齢者の孤立)を、医療・介護・福祉の公的サービスでケアすることの限界を感じ、住民主体の医療・介護・福祉(以下、地域ケア)の必要性を感じていました。しかしながら、住民にはすでにそれぞれの暮らしがあり、地域ケアを実現するための具体的な手法を模索していました。

そんなとき「対話型ファシリテーションの手ほどき」を読み、メタファシリテーションを知りました。自らのメタ認知を用いてファシリテーションを行い、相手のメタ認知に働きかけることで、住民の自主的な活動を促すこの手法は、具体的な地域ケアの方法論として非常に腑に落ちました。それから、メタファシリテーションを学び、医療・介護・福祉分野にメタファシリテーションをどのように応用するか試行錯誤しながら現場で実践を重ねてきました。

ムラのミライと一緒にやってきたこと (1)

医療・介護・福祉現場でのコミュニケーションでの応用

みなさんは、病院でうまく相談したいこと・聞きたいことがまとまらずに、モヤモヤした気持ちで帰ってきてしまった。そんな経験はないでしょうか？

メタファシリテーションをご存知のみなさんはその理由が思い当たるかもしれません。

「今日はどうしましたか？」と“考え”を聞かれてしまうことで、患者としては本当に相談したい“事実”が話せずに診察が終わってしまうこともありました。

医師は正確な情報収集（事実）を聞きたいのですが、実は聞く技術を知らないために、聞けていないのです。一方で、患者さん側には、よく聞いてくれなかったという不満が残る、こういった光景は、医療分野だけでなく、福祉・介護の現場も含めてあちこちで起きています。また、専門職同士であってもお互いに事実をうまく聞きだせないことで、会議の進行が遅れることや、患者さんに対する方針の共有がうまくいかないこともあります。

事実質問ができると、このような時に正確に情報を収集でき、患者さんもよく話を聞いてもらえた、言葉になってなかった相談事をしっかりと聞くことができたと感じてもらえると思います。

また、「食事に気をつけましょう。」

このようなアドバイスを病院でもらったことはないでしょうか？

なかなか行動にうつせませんよね。メタファシファシリテーションを学んだことがある人であれば、アドバイスされても・・・と思うかもしれません。もし食事に気をつけて欲しいのであれば、「昨夜は何を食べましたか？昼食は何を食べましたか？」と、患者さんの食事に対する事実を一つ一つ確認し、患者さんが自分の食事に対する改善点を気づき、メタファシリテーションを行った方が、患者さんは自分から生活習慣を改善してくれます。

このような経験を医学書や記事、講演会で発信しています。



医師の学会(プライマリケア連合学会)で教育講演を実施

(写真左=前川香子 写真右=原康子 いずれもムラのミライ職員)

ムラのミライと一緒にやってきたこと(2) 医療・介護・福祉の現場でのフィールドワーク

次に、患者さんや利用者さんのことを実は我々はよく知らないまま、医療・介護・福祉を実施していることがあります。例えば、以前私が赴任していた地域で、町の保健師さんたちにメタファシリテーションの研修をうけていただき、漁師さんにインタビューをしてもらいました。すると、漁師さんの生活指導の介入点、適切な健康診断の実施時期などいままでもわかっていて、思い込んで実は知らなかったことが出てきました。このような、専門職が当事者の立場をより鮮明にとらえることができるようなワークショップを実施してきました。



保健師さんたちと漁師の方々へ
インタビュー

今後、ムラのミライと一緒にやりたいこと(1) 医療・介護・福祉の現場にすぐにかせる講座の企画

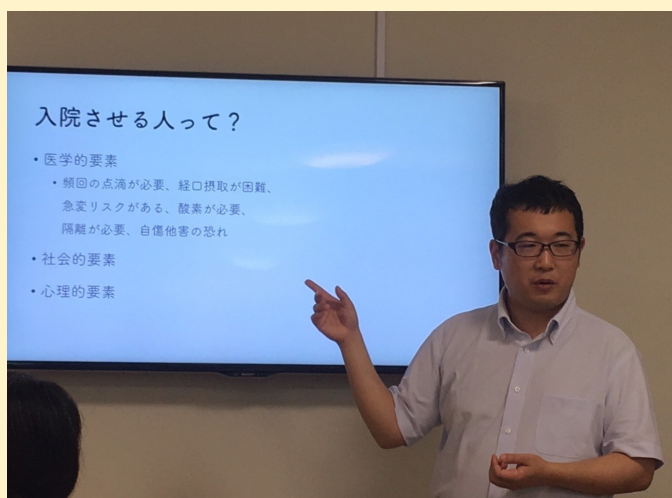
今まで実施してきた講演をもとに、より医療・介護・福祉現場に特化した講座を企画したいと考えています。メタファシリテーションは非常に汎用性のある手法ですが、習得までに多くの時間と経験を要します。そこで、すぐに現場で効果を実感できるように、医療・介護・福祉の各分野の情報収集、行動変容に特化した講座を作成し、関連するメタファシリテーションの要素だけを集中的に学べるようにしたいと思います。現場でメタファシリテーションの効果を実感できる人が増えることで、より継続的にメタファシリテーションを学び続ける人が増えることを期待しています。

今後、ムラのミライと一緒にやりたいこと(2) 住み慣れた土地で安心して暮らすために

また、ムラのミライが発展途上国で実施してきた地域開発を、医療・介護・福祉の分野で国内でも実現したいと思っています。皆様もご存知の通り、日本では少子高齢化が急速に進行しています。日常生活が困難となった高齢者が、近くに介護をする人がいないため、住み慣れた土地に暮らし続けることができなくなる。高齢者同士が介護をし合うというような現状が当たり前になってきました。こういった現状に公的サービスでは対応しきれなくなっているのが現状です。住み慣れた土地で安心して暮らせるように、メタファシリテーションを用いてその土地に住む住民の力で解決策を見つけ出す。そのような地域開発を実施していきたいと考えています。

最後に

様々な現場へメタファシリテーションを普及させ、医療・介護・福祉での住民主体の地域開発の実践例を増やしていきたいと思っています。進捗があり次第、メールマガジンなどでご報告させていただきますので、楽しみにお待ちください。



メタファシリテーションを用いた地域資源の探索ワークショップ

冬の大間病院周辺の風景



ムラのミライについて

「ない」ことは本当の問題なのか？

認定NPO法人ムラのミライは、1993年に岐阜県高山市で設立されました。設立当初は「インド山村部の貧困層を助けよう」と、識字教室や収入向上活動など、「ない」ものを投入する支援から始まりました。しかし、さまざまな活動を経て、都市化と市場経済化の進展がコミュニティとコミュニティの維持してきた自然資源やセーフティネットを衰退させ、多くの社会課題を生んでいること、それが海外・日本に共通する構造であることに気づきました。



地域づくりで、医療で、子育てで

メタファシリテーション手法を書籍やセミナー・研修で伝え、住民の行動変化を促すスキルを持つファシリテーターを育成してきました。国際協力分野だけではなく、日本国内での地域づくりや、医療・福祉、子育てといった分野で実践する人が増えつつあります。

ご寄付やサポーターを募集しています

ムラのミライはこれからも、日本と海外の地域コミュニティで、より多くの方がメタファシリテーションを使って、その地域の人々が選び取る未来を実現していくお手伝いをしていきます。具体的には、

- 日本・海外でプロジェクトの段階に応じた研修やフィールドワーク型研修を企画・開催していきます
- メタファシリテーションの事例やQ&Aを蓄積し、ブログや書籍で発信していきます
- 国内外のより多くの人々に講座を届けるため、ムラのミライ認定メタファシリテーション・トレーナーを養成していきます
- 若い世代に安価に講座を受講してもらうための仕組みをつくります

ぜひ会員・サポーターになって、メタファシリテーションの進化・広がりを応援してください！



コミュニティに「ある」ものを引き出し、課題解決を促す

そこで、住民との対話を通じてコミュニティに「ある」もの＝彼らの持つ経験や知識を引き出し、住民自身による課題分析・解決を促す「メタファシリテーション」手法を開発。徹底的に住民主体にこだわり、インド、ネパール、セネガルで、コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出すためのプロジェクトを実施してきました。

